

## 9-10月の動き

東アジアの歴史問題と靖国論争

バブル経済 - 我々は何を学ぶことができたか?

日本は「海の文明」を目指せ

映画音楽考

## 東アジアの歴史問題と靖国論争

**未**来を考えれば考えるほど過去が問題になってくる。日本が直面する「歴史問題」がその典型で、このところ話題になっている「アジア共同体」の形成に日本が中核的な役割を果たすには、韓国や中国との歴史・教科書問題の解決が必要不可欠である。また最近小泉首相が唱えている国連安保理の常任理事国入りを果たすためには、すでに常任理事国である中国の理解を得なければならないが、それには靖国参拝などの歴史問題に目途をつけることが要求されるであろう。

この難しい問題の解決に対する重要なヒントを与えてくれたのが、9月14日のIUJ-情報発信合同セミナーにおけるアジア財団代表アンドリュー・ホルバート氏のプレゼン「東北アジアにおける歴史和解」であった。ホルバート氏によれば、日本はEUにおけるフランスとドイツの関係から学ぶものが多いという。両国は過去の戦争の経験乗り越えるため

に歴史問題や教科書問題に真剣に取り組む、議論を重ねた結果、共通の内容を含む教科書の作成など歴史和解に達して、EUの形成に中核的な役割を果たした。日本も歴史問題を感情的にとらえるのではなく、靖国神社の役割などを歴史的かつ客観的に振り返り、外国からも理解を得るような問題処理を考えるべきであるとの主張を展開した。

それに対して、セミナー参加者から賛否両論が飛び交い、日本の歴史問題は何よりも日本国内で意見の分かれる難しい問題であることが実感された。その中で、欧州での自分自身の体験を踏まえつつ、冷静に対話と相互理解の重要性を説かれるホルバート氏の真摯な態度と対応が実に印象的であった。

なお同氏は、憲法問題についても、以下で重要な主張を展開されている。

([www.glocom.org/interviews/s\\_inter/index6.html#0924horvat](http://www.glocom.org/interviews/s_inter/index6.html#0924horvat))

- 宮尾尊弘 (情報発信機構長)



アンドリュー・ホルバート氏

## 目次

9-10月の動き	1
東アジアの歴史問題と靖国論争	1
チャドウィック・スミス氏の講演	1
バブル経済	
- 我々は何を学ぶことができたか	2
日本は「海の文明」を目指せ	2
映画音楽考	3

## チャドウィック・スミス氏の講演

先月号の第一面でご紹介したように、情報発信機構では、夏の間国際大学の院生、スミス氏をインターンとして受け入れ、情報発信活動にも多大な貢献が行われたが、インターンシップ終了に際し、同氏が講演を行った。専門分野であるアジア地域に焦点をあてた国際関係論の研究過程で最近情

報収集と分析を行ってきた北朝鮮問題の一環として、米軍を脱走したとして訴追されているジェンキンス氏を巡る問題についての解説であったが、これまでの研究のみならず、自らの軍隊での経験をも踏まえての、米国と北朝鮮の視点に踏み込んだ説明は、非常に興味深いものとなった。

## バブル経済 - 我々は何を学ぶことができたか？

**日** 本が経験したバブル経済については、主として現象面から数多の検証が行われているが、行天豊雄国際通貨研究所理事長が、より本質的な問題の所在についての考察を行っている。

バブル発生の直接の原因が経済への急速な流動性の注入にあったことには明らかであるが、ではなぜそういう事態に陥ったのか。今からみれば非常識かも知れないが、80年代後半には、経済成長に伴って不動産価格が上昇することは当然と思われていた。また、日銀は、不動産価格の上昇は一般物価上昇とは異なると考えており、自らに関わる問題という認識が乏しかった。しかし89年には本格的な物価上昇が始まったため、危機感を覚えた日銀は公定歩合を急速に引上げ、また政府も不動産向け融資規制を発動し、バブルは破裂した。

その後、この経緯については多くの分析が行われ、様々な教訓が得られたが、バブル発生を防げなかった重要な理由は四つがあげられよう。円高・日米貿易不均衡・財政赤字など、経済の諸

分野に既に現れていた危険の兆候を正しく評価できなかったこと。構造改革こそ推進すべきであったにもかかわらず、円高対策に躍起となると、経済政策としての目標設定を誤ったこと。国内需要喚起政策として、財政の出動がないまま、金融緩和に偏りすぎたという形で、政策の手段を間違えたこと。そして漸く金融引き締めが実施されたのは既に手遅れであった89年、しかもその遅れを取り戻すために急激かつ大幅な引き締めを行うという、いわば政策実施のタイミングを間違えたことである。

更に、なぜこのように幾重にも間違いを重ねたのかに答えるためには、日本の政策決定構造にも触れなければならない。非力な日銀、傲慢な財政当局、既得権保持のために跋扈する政治家、そして指導力を発揮せずに理念無き妥協を図るばかりであった政府、そして、信念や先見性に乏しいまま大衆迎合と日和見主義に脱したメディアも一角を担った。

[http://www.glocom.org/opinions/essays/20040921\\_gyohten\\_asset/](http://www.glocom.org/opinions/essays/20040921_gyohten_asset/)



バブルの元は？

## 日本は「海の文明」を目指せ

**地** 図の上で東アジアという範囲を切り出してみると、中国が大きな部分を占める。大きさともかく、アジア大陸内に国土が大きく広がった姿によって、東アジアに占める大陸の部分に目が行き易い。これに対し、川勝平太国際日本文化研究センター教授は、日本の文化の独自性を西洋の文献等を踏まえて改めて検証し、その上で、日本は東アジアの一員としてこの地域の国際協力を進める過程では「海の文明」を目指すべきであると提言する。

日本は、マルコ・ポーロの時代からハンチントンに至るまで、アジアの他の国々、そして中国とも異なる独自の文明として西洋人に認識されて来た。この原因を色々分析してみると、日本の文明は、他と異なり、自然に対立し破壊することによってではなく、周りの森や水を有効に生かしながら築かれたという要素があげられる。それによって健康

な山河が維持され、その結果豊かな漁場が養成され、やがて漁港から港町が形成され、そしてそれらの町を繋ぐ海のネットワークが構築された。

翻ってみれば、現在の東アジアは、海を中心にして、島と沿岸部の連携をもって経済活動や人々の生活が成り立って居るという点で、中・近世の日本に似ている。こうしてみると、中国内陸部は広大ではあるが東アジアという枠組みからは寧ろ例外の地域であることが分かる。事実、発展も遅れている。

歴史的教訓としても、日本は大陸に深入りしたときには失敗している。日本が目指すべきは、海洋東アジアであり、更に東アジアからオセアニアにかけて美しい島々からなる「豊饒(ほうじょう)の海の三日月弧」の海の文明である。

[http://www.glocom.org/opinions/essays/20040913\\_kawakatsu\\_japan/](http://www.glocom.org/opinions/essays/20040913_kawakatsu_japan/)



豊饒の海の文明を

## 映画音楽考

映画音楽作編曲家 中西長谷雄

先日、日本のポップス界きってのヒットメーカー織田哲郎さんが久しぶりに自分のアルバムを出すので編曲を手伝って欲しいと言う話があった。織田さんは「世界中の誰よりきっと」、「踊るポンポコリン」やB'z、WANDS、ZARD、などの作曲で数千枚を売り上げてきた人で、さすがに日本のポップスシーンには精通



指揮をする中西氏

している。一通り打ち合わせをした後、食事をしながら日本とハリウッドの映画音楽の違いという話になった。私は映画音楽家クリストファー・ヤングのアシスタントを終え帰国して間もないので、こういう人のアドバイスは渡米中の空白を埋める意味でも大変ありがたい。

日本に帰ってしばらくして分かってきた事だが、日本ではハリウッドより作曲家にアーティストやタレント的なキャラクターを求める傾向がある。一方、ハリウッドでは数十億円をかけた大事な映画に作曲家の個性(ego)を許可なく発揮して映画の別な要素を加えようとすればたちどころに首になる。

ハリウッドの映画製作では作曲家に限らず最高の技術を持った人達が、自分を表現するのではなく監督やプロデューサーの求める物を提供するために全力を尽くす。作曲家はひとつのジャンルだけではなく、様々なスタイルに精通している事が求められ、アーティストとしての自分ではなく、どうやって映画を面白くするかという一点に集中しないと、とても第一線では通用しない。私はこのハリウッドスタイルを仕込まれてきたので「自分を殺して映画を生かす」事が当たり前で、それが出来ない者は自然に淘汰されると信じていた。

監督との打ち合わせは必ず記録され、どんな指定があったか契約として残される。まずは監督が何を表現したいかが最優先だ。いくら激しい音楽を作っても台詞のあるところは必ず音楽を落とす。観客の意識が音楽以外の要素に集中している場面ではその集中を妨げないように音をつける。その結果音楽は印象に残らなくても、ストーリーが面白く感じられたり、少しでも俳優の演技がうまく見えたりすれば大成功だ。

一流の作曲家はこういう技術を持っていて20億円以下の低予算映画を普通の映画に、70億ぐらいの普通の映画を

それ以上に見せる事が出来るわけだ。ハリウッドのプロデューサーはそういう価値を知っているのだから、音楽にかかる予算を闇雲に削ろうとはしない。音楽にお金をかける事が映画の価値を高める上でいちばん投資効率がいいという事を十分理解している。

織田哲郎さんに指摘され新

たためて認識したのは、映画を生かすために自分の個性を殺しては日本では売り出しにくい、また、テーマ以外の映像背景となる音楽はとにかく安くあげるとしか考えていない、ということである。個性を出してもいいという事であれば、我々作曲家には願ったりかなったりだが、次の背景音楽は何が何でも早く安く、というのはどうにも困った物だ。

国際的に競争力を持たない産業は衰退し、いずれは淘汰される、という現代社会の常識から言っても、「何でもいから」などというのは閉ざされた国内マーケットだけで通用する時代錯誤の話だが、どうも日本映画界はそういうやり方に慣れてしまっているようだ。

確かに日本映画では一本の総制作費だけではなく、音楽にかかる予算の配分もハリウッドと比べて著しく低い。作曲家もそういうやり方に順応させられているので、いざ「さあ今度はちゃんと予算をとったので、思う存分いい音楽を作ってください。」と言われても、急に今までと違った発想が出来るわけがない。

確かに派手なテーマ音楽は人の印象に残り、うまくすれば曲自体でもヒットする。しかし、本当に映画で大事なものは背景で流れる何気ない音楽なのだ。そういう無意識な部分が一本の映画を国際的な水準まで高めるためにはどうしても必要だ。そのためにも、少なくともプロの制作者には、俳優を輝かせ、観客をストーリーに没頭させる一流の音楽家たちの技術を理解して欲しい。人は俳優の演技に見入り、ストーリーに没頭しているときには音楽は聞こえなくなる。それでも音楽は映像に付加価値を与え、ある時は俳優の何でもない仕草を名優の演技に変える事が出来る。それが本当の映画音楽であり、プロの技である。そしてその感動の合間を縫って印象的なメロディーが少しだけ流れれば映画はそれで十分だ。





月報・日本から発信！

月1回月末発行  
発行人・宮尾尊弘  
編集人・浦部仁志

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター  
106-0032 東京都港区六本木 6-15-21 ハークス六本木ビル2F  
TEL: 03-5411-6714 / FAX: 03-5412-7111

ウェブサイトにもぜひ  
<http://www.glocom.org>

真夏日の最多記録に続いて、台風の上陸数でも記録を更新した日本の夏でしたが、カリブ海から米国東部にかけても、ハリケーンの被害が甚大でした。カリブ海諸国の被害、特に人的被害が一般に米国を大きく上回るの、厳しい自然とそれがもたらす災害に対する耐性のレベルは、文明の程度に拠る、という説があるそうです。確かに台風による日本の人的被害も、過去の歴史や周辺国・地域と比較してみれば少ないと言えるのかも知れません。

毎年「異常」と言われる気象が、単なる変動サイクルの一環なのか、はたまた、地球温暖化による一方的変化の影響なのか、あたかも景気の動向についてと同じような議論が行われています。その原因について諸説あるところも似ている気がします。

内閣改造を終え、いよいよ小泉総理にとって改革の正念場ですが、国際的にも懸案が山積し、日本の舵取りがますます難しくなって来た中で、日本からの様々な意見を発信することの重要性は増すばかりと言えるでしょう。

## 後記

第一ページで紹介した9月14日のIUJ-情報発信合同セミナーでは、ホルパート氏に加え、もう一人、日本銀行考査局調査役の徳丸浩氏を講師に迎えた。同氏が当時派遣されて居たIMFで実務の担当者として関わった、1997-98年の東アジア金融危機に際しての分析を、各国政府や民間金融機関、そしてそれを巡る市場の生々しい動きを含め、興味深く解説された。

更に同氏からは、日本の金融機関の不良債権問題について、同時期に発生したスウェーデンの金融危機と対比する形で、明快な分析を行った。

分析の多くが個人的見解ということでもあり、こ

で詳しい内容の紹介が出来ないのは残念であるが、出席者には実り多い講演であった。

尚、このセミナーでは、徳丸氏のみならず、ホルパート氏も同氏自身の希望により、非常に堪能な日本語で講演を行った。

しかしこのように、外国人研究者が日本語で発表することが話題になること自体、日本語でコミュニケーションできる空間が小さいことを表しており、その是非と状況への対処には種々意見もあるが、まずはやはり海外への情報発信は英語で行う必要がある、と改めて痛感せざるを得ない。

(今後のセミナーの通知については、以下ご参照  
<http://www.glocom.org/seminar/index.html>)

### GLOCOM情報発信機構

親委員会メンバー  
公文 俊平 (委員長)  
青木 昌彦  
猪口 孝  
牛尾 治朗  
行天 豊雄  
小林 陽太郎

親委員会特別顧問  
中山 素平

運営委員会  
宮尾 尊弘 (委員長)  
佐治 俊彦  
中馬 清福  
勝又 美智雄